K.A.ウィットフォーゲル『東洋的専制主義』（1981年:
ヴィンテージ版）の「前文」への解題とその全文訳

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 知章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16473

明治大学教養論集　通巻479号
(2012・3) pp. 1-49

K. A. ウィットフォーゲル『東洋的専制主義』(1981年：ヴィンテージ版) の「前文」への解題とその全文訳

石　井　知　章

解　題

以下に掲載する論文は，K. A. ウィットフォーゲル (Karl August Wittfogel: 1896年～1988年) の主著，『東洋的専制主義』(*Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power,* Vintage: New York, 1981. Paperback.) に付された前文，「ますます“不安を駆り立てる”ことになった議論についての前文」(Foreword concerning arguments that have become increasingly “disquieting”)」の全文訳である。ウィットフォーゲルは，この『東洋的専制主義』を先ず，1957年にエール大学出版社から出版した。だがその後，反共的雰囲気のきわめて強かった当時のアメリカの政治的，社会的状況が大きく変化したことと，この書をめぐって現れた数々の社会的評価もそれなりに定着してきたという新たな時代背景の下で，1957年版の本章での内容そのものにはほとんど手をつけないまま，1981年，この「前文」を掲載してヴィンテージ出版社から再版したのである。

しかしながら，そうした社会的状況をとりあえずおけば，ウィットフォーゲル自身がこの再版で意図した最大の目的とは，この主著をめぐってさまざまに評価，批判されながらも，本来の解釈をめぐり，新たな読者をこの「前文」によって一定方向へといざなうことにあった。本書の日本語訳としては，

すでに1957年版が井上照丸訳『東洋的専制主義:全体主義権力の比較研究』（アジア経済研究所）として1961年に，さらにこのヴィンテージ版（1981年）が湯浅赳男訳『オリエンタル・デスポティズム：専制官僚国家の生成と崩壊』（新評論）として1991年に，それぞれ出版されている。だが，きわめて遺憾なことに，新版である後者には，この「前文」が収められていない。その理由について湯浅は，「この文章はその時までに本書が蒙った卑劣な中傷，歪曲に対する抗議の論争文ですが，国際共産党体制が崩壊した今日では問題を解決してくれていますので，あえて翻訳を避けることといたしました」と記している（同上，「訳者はしがき」2-3頁）。しかし，これは明らかに，ウィットフォーゲルの意図とはかけ離れており，本来そこに企図されていた効果を大きく損なうことになったといわざるを得ない。

このことは，戦後の日本においてウィットフォーゲル研究を支えてきた湯浅赳男ですら，他の多くの研究者がそうであったように，「水力的社会」の「全面的権力」を歴史的かつ社会的に説明するものとしてしかこの書を読んでこなかったことを意味している。だが，この全文を読めば自ずと明らかなように，ウィットフォーゲルがこの文章を付した最大の目的とは，20世紀に起きたいわゆる「社会主義革命」によって成立したロシアと中国の政治社会体制のもつ「全面的権力の根源」の解明へと読者の関心を向けることにある。湯浅の指摘するように，それはたしかに「文明を創造した大規模な灌漑農業治水灌漑農業にまでさかのぼる」ものであるのかもしれない。だが，さらにその背後にあった本質的意味とはいったい何であったのかが，ここで問われているのである。ウィットフォーゲルのみるところ，それはマルクス主義者，非マルクス主義者とを問わず，現存する（あるいは現存した）「社会主義」体制の問題に真剣に取り組んできた世界の知識人たちの「不安を駆り立てる」ものの根源にある，「アジア的復古」の問題である（これについては，拙書『K. A. ウィットフォーゲルの東洋的社会論』社会評論社，2008年の序章を参照）。だが，当の湯浅だけでなく，戦後日本におけるアジア的生

産様式論をリードしてきた塩沢君夫，小林良正，福富正実，本田喜代治，小谷汪之，福本勝清といった研究者ですら，このマルクスの「アジア的」なものをめぐる最大の「秘密」を見過ごしてきてしまった（ただし，湯浅は『「東洋的専制主義」論の今日性 —— 還ってきたウィットフォーゲル』新評論，2007 年で，その問題について語り始めている)。これはまさに，アジア的生産様式の日本における議論をめぐり，本稿のなかでウィットフォーゲル自身が「共産主義国家の内外で 1962 年から行われてきた『大論争』とは多くの細かい点で異なっているが，一つの点では類似している」としつつ，以下のように続けざるを得なかった特殊日本的状況を示している。すなわち，「それは不安を駆り立てるロシアの問題を，覆い隠したままにしようという究極の努力を明らかに反映しているということである。そこには，マルクスの半アジア的ロシアの解釈をめぐる顕著な認識はない。ロシア的社会と革命に関するレーニンのアジア的解釈についての顕著な認識もない。アジア的社会，ロシアと中国における『アジア的復古』の概念に関する日本人の議論は，著名な東ヨーロッパのコミュニスト，テーケイやその友人によって私がマルクスの『アジア』に関する貴重な概念を奪っていると表現された事実と同じくらい，決定的に混乱しているのである」(本文より引用)。

だが，このことの理解なしに，ソ連を中心とした「国際共産党体制が崩壊した今日」，なぜ中国だけが，むしろ代表的な「世界の超大国」の一つとして躍り出ることになったのかについて解明することは不可能であろう。中国やその「アジア的」分析に関するウィットフォーゲルの著作は，戦前の日本では広く翻訳され，読まれていたにもかかわらず，その読者は戦後には極端に減り，しかもその評価をめぐっては，本人自身が認めるように「もともと彼らが肯定的であったのと同じくらい，否定的であることが支配的である」。とはいえ，この「アジア的復古」という概念を中心にして世界史のパラダイムを組み直すことの意味が，ポスト「社会主義」時代にグローバリゼーションが急速に突き進んでいった今日にこそ，問われているのである。そうした

議論を再開する上で本稿が，一つの潜在的起爆力を内在していることだけはたしかであろう。

ますます「不安を駆り立てる」ことになった議論についての前文

K. A. ウィットフォーゲル (1981 年)

絶対的権力をめぐる私の比較研究である『東洋的専制主義』の最初の出版から 20 年以上が過ぎた。この著作で私は，世界の開かれた社会で重要な危機が醸成されているとの考え方を保持した。それは全世界を理解するには，東側世界の理解が必要になるということ，そしてこの理解には，マルクスとレーニンという二人の人物によってきわめて重要な，だがほとんど人の気づくことのなかった転機が与えられている，ということである。

それ以来，マルクスとレーニンを理解する必要性は驚くほど増大した。それ以来，マルクス主義は，多くの国で絶えず変化し，落ち着くことのない知識人たちの共通語となった。そしてこの危機は，政治的，社会的，かつ倫理的でさえあり，それは思想（マルクス主義を含む）の危機のみならずモラルの危機でもあるが，今日では 1957 年にそうであったよりも恐ろしいものに，さらにずっと恐ろしいものになっている。

『東洋的専制主義』の読者は，私がいわんとしていることを理解するだろうか。多くの国々，共産主義支配下の国々でさえ，私は「水力社会」理論の著者として知られ始めてきた。この点に関しては，一般的なコンセンサスがある。だが，共産主義世界とそのイデオロギーを共有する領域では，私の社会史的及び政治社会的な分析は，立ち入り禁止とされている。

1962 年のコミュニストの活動では，ハンガリーの中国研究者 F. テーケイ (Ferenc Tökei) がアジア的生産様式の概念をめぐる「大論争」の第 1 回会議への基調講演をするためにパリに行き，私を攻撃の的の中心に置いた。彼によると，私はマルクスの「貴重な」アジア的概念を，邪悪なプロメテウス

のように理解した。まもなく放棄しようとしたが，忘れ去ることができなかった定式の中で，彼はこの概念の「再生」の必要性を主張している。「大論争」へのフランスからの参加者であり，著名な中国研究者であるJ. シェノー（Jean Chesneaux）は，テーケイによる1964年の第2回会議[1]と1966年の議論を繰り返し，私の著作を「東洋的専制主義について不安を駆り立てるウィットフォーゲルの著作」と言及した（l'inquietant ouvrage de Wittfogel sur le despotism oriental)[2]。

A. 重大なるイデオロギー的秘密の「アジア的」根源

なぜスターリンがマルクス主義の遺産から，アジア的生産様式の思想を排除したのか，そしてなぜスターリンの死後，コミュニズムの信奉者たちがロシアの「半アジア的」条件というマルクスの見方とロシアの「アジア的復古」というレーニンの見方を覆い隠そうとしたのかを理解するのは容易なことである。この複雑な感情のなかでも最も不安となる要素は，もちろん，アジア的復古の概念である。アジア的（水力的）社会と東洋的専制主義についての私の研究に対する攻撃の裏にあるものは，私のアジア的再生の概念についての暴露であった。この概念をめぐる私の考察は，『東洋的専制主義』の中で体系的に，そして全ての関連文献とともに提示したところだが，レーニンがプレハーノフ（Plekhanov）との1906年の論争以来[3]，理論的にアジア的復古を承認しており，1917年以降まさにそれを現実化したのである。レーニンは高度に啓蒙的な承認によってそのことをおこなった。レーニンの支持者たちは，自らがその受益者であるところの新政権を擁護しつつ，その遺産を「純化」した。とりわけ，レーニンの定式である「アジア的復古」，そしてロシア革命を社会主義の方向に進め，退化させないために必要であると考えた「担保」の効果に関して，これらを相互に縛りつけようとするレーニンの諸議論を根絶しようと試みた[4]。

レーニンにとって社会主義は，マルクスが1871年にパリ・コミューンの

意味合いで輪郭を描き，レーニン自身がコミュニズムへの道に必要な段階として，1916 年から 1917 年に『国家と革命』で公式に受け入れた社会秩序である。プレハーノフが不可避と宣言し，レーニンが恐れたボリシェヴィキ革命の衰退は，レーニンとプレハーノフがそれを時には「半アジア的」と，時には「アジア的」と呼んだ「旧」帝政（ツァーリズム）秩序の復古を伴っていた[5]。

社会史的観点からは，「完全なる」アジア的と「半」アジア的形態の相違は，きわめて重要である。まずインドに関して最初に形成されたマルクスの観点では，東洋的専制主義は，大規模国家が運営する水管理事業や水力農業経済と連結している分散した村落共同体の制度を有する農業秩序を基礎にした，完全なるアジア社会に出現した。もちろんロシアにはそのような水力農業経済は存在しなかったが，分散型村落共同体は，外から持ち込まれた東洋的専制主義に十分な土台を提供した[6]。私は内陸アジア，とりわけ水力農業経営がわずかな役割か，まったく何の役割も果たしていなかった中国の征服社会とその派生社会のなかに半アジア的社会の変種を見出した[7]。

『東洋的専制主義』は，これらの多様な社会形態，「完全な」アジア的社会についてのマルクスの定義，そして「ロシアの半アジア的社会」を扱っている。ここで私は，「アジア的復古」の問題にとって本質的な一つのポイントのみに絞る。マルクスによれば，東洋的社会の二つの主要な変形社会，「完全な」アジア的社会と「半」アジア的社会のいずれかで暮らす人々は，制限されない専制主義というくびきの下にある。マルクスの見解では，東洋的専制主義は，全ての「歴史的原動力」を，そして意味ある政治的闘争に身を投じようとする意思を抑え込む。後述する理由により，マルクスは，東洋的専制主義について論じる際に「階級闘争」という一触即発（explosive）の用語の使用を避けた。だが，マルクスは，このような政権下には，『共産党宣言』で定義されている階級闘争はなく，進歩的社会変革のための政治闘争も社会革命もないことを明確にしている。彼は，「かつてアジアで耳にした唯

一の社会革命は，非アジア的征服者，イギリス人の行いによりもたらされたものであり，彼らはその「野卑な（swinish）」植民地政策にもかかわらず，歴史の見えざる道具として，インドにおいてより高貴な社会形態の人間関係への突破口を開いた」とマルクスは述べている[8]。

これらはマルクスが1853年，『ニューヨーク・デイリー・トリビューン』誌上でインド（及びアジア）社会に関するその「考察」の中で発表した東洋的専制主義に関する思想である[9]。これらは，その社会史的中心を1867年に『資本論』の第一巻で公表し[10]，1925年に原本が容易に入手できるようになった概念である[11]。帝政ロシアを「半アジア的」社会とするマルクスの解釈はこれらの概念から生じており，ロンドンで1856年から57年に『フリープレス』において，「18世紀の秘密外交史」[12]というタイトルで全文が掲載された一連の記事に，きわめて詳細に述べられている。もしある種の望まれた担保が効力をもつのかそれとも錯覚なのかを証明すべきであるとしたら，表面上は成功したロシア革命も退歩するに違いないというレーニンの恐れもそこから生じている。十月革命の最初の数年の出来事は，これらの担保がまったく効力のないものであることを示した。レーニンは1919年以降，自分自身がそれをもたらすことに貢献した発展を，不承不承ながら認めたのである[13]。

東洋的な意味で専制的である諸制度の復古とは，レーニンが希求し，かつ成し遂げた革命の恐るべき秘密である。だが，多くの国の多くの知識人や労働者にとって，この革命はロシアが着手した「社会主義的」発展の拡がりのための闘いへの —— もし必要とあらば，そのために死ぬことへの —— 呼びかけを含んでいた。

この革命が何であったのかが暴露されたとき何が起きるのであろうか。この革命の行き先が社会主義ではなく，レーニン自身がいうところの東洋的専制主義の新しい形態であることが知られたとき，何が起きるのであろうか。特権的な受益者を除いて，誰がアジア的復古のために死ねるのだろうか。

権力政策の観点からは，ヴェールに覆われた寓話的言葉でこの秘密を語る

とき，レーニンは一貫していた。彼らの見解では，スターリンとその後継者がまずマルクスのアジア的概念を検閲し，とりわけ「東洋的専制主義」出現後に，これらの概念のロシアにとっての意義を隠蔽しようと試みた際，たしかに彼らは完全に論理的で，レーニン以上に一貫性があった。アジア的復古の受益者の見地からは，彼らがこれらの「不穏な」思想を恐れ消し去ろうと努めることは，完全に理解できる。だが，知的にも道義的にも開かれた世界のイデオロギー的，かつ政治的指導者が，今日，山積みの世界的危機のなかでますます重要になり，ますます不安を駆り立てているこれらの概念を無視しているということが，どれだけ理解されるだろうか。もし「社会主義」世界が「アジア的」運動の法則に従っているのだとしたら，アメリカの「民主主義」(アレクシ・ド・トクヴィルがその複合体を称したように）やその他の同じように条件付けられたヨーロッパ，日本，南半球の秩序は，自らのものとは根本的に異なる基礎を有した社会に立ち向かっていることになるのである。

B. 秘密のもう一つの側面

民主主義社会の指導者は，長すぎるほどの長い間，ロシアを彼ら自身の制度的尺度で測ることに満足していた。彼らは，ソ連の産業は未熟で生活水準は低いので，世界の権力としてソ連は西側社会からはるかに立ち遅れていると信じてきた。われわれは，ワイマール共和国の時代と第二次世界大戦の末期にもこの主張を聞いた。それは誤りである。ソ連は世論の圧力に敏感な国にあてはまる。だが，たしかに「完全なる」アジア的社会にはあてはまらない。チンギス・カンが徹底的に征服した「半」アジア的状態にもあてはまらない[14]。1950年5月，第二回世界地域研究全国大会で，私は以下のような議論を表明した。「チンギス・カンの経済的潜在能力は未熟で劣っている。中国の大農業社会が成したような大きな勢力をモンゴルが創出したことは恐らくなかった。敵対する権力経済の相対的全体力が争点であったとき，事なか

れ主義の戦略家のみが，自給自足経済の側面を強調することで自己を慰めることができた」，と[15]。

全体主義国家の自給自足経済と権力経済の関係は，基本的に民主主義国家のそれとは異なっている。第二次世界大戦末期の経済的に疲弊したソ連軍による東ヨーロッパの接収がこのことを説明している。スターリンは，その拡大主義を実行するために，「兵士帰還運動」（彼が予期したものではなかった）という効果的な圧力によっても[16]，西側での権力の空白状態の利用を妨げられることはなかった。

同じ原理の非軍事的変種が，ワイマール共和国に対するロシアの態度を形づくっていた。ソビエト連邦の自給自足経済はきわめて脆弱だが，その権力経済は，第一次ソビエト飢饉（1921 年～22 年）と第二次ソビエト飢饉（1931 年～32 年）の時期にドイツ共産主義運動に多額の資金投与を許すほどには強固であった。スターリンはドイツの「反ベルサイユ」ナショナリズムを「ヨーロッパに埋められた地雷」と見なしていた[17]。政治的かつイデオロギー的ソビエト外交政策が有する武器，すなわち共産主義インターナショナルのドイツ部門（スターリンが指揮する）は，ドイツの全体主義との闘いを麻痺させるには十分強力だったので，他のマクロ戦略家と共有しているこの洞察は，スターリンの場合，効果的行動への転化が可能だった。

スターリンの政策は，ヒトラーが権力を握ることを可能にした。われわれはソ連のパルチザンが隠蔽しようとしたこの事実を忘れてはならない。幸運にもわれわれには，危機的な時期にも共産主義インターナショナル（コミンテルン）のモスクワセンターにおいて最も高い地位を有した C. J. グートマン（Czech Joseph Guttmann）の証言がある。ドイツ共産党の運命を決定する行動の陰には，コミンテルン（スターリンが指揮するコミンテルン）があったというグートマンの供述は，曲解はされたが，共産党の報道機関によっても消し去られることはなかった[18]。たしかに，スターリンの権力は，西側ではなく，東側の絶対主義という意味で全体主義的であったがゆえに，そし

て旧（アジア的）ロシア体制と近代のファシスト政権の両方にはなかった有効な政治的武器（すなわちソ連に第五列という独自の支援を与える武器）を手元に有していたがゆえに，スターリンがヒトラー政策を遂行できたことも忘れてはならない。ソビエトの制度は，ムッソリーニよりも国際的魅力の強かったヒトラーのファシズムのような国家主義者の全体主義であるだけでなく，確実に制限もされている。ソビエトの制度は，「社会的」全体主義であり，その国際的な魅力は社会主義への要求が信じられている限り世界的規模のものである。

マキャヴェリは，封建的状態の下では，自国の支配者に反対し，海外勢力と協力する用意のある不満分子を現地に見つけることは容易だと考えていた。だが，彼はトルコのようにアジア的専制主義という砦のある場合にはあてはまらないと断言した。フランスのような緩く統合された国は，簡単に突破できるのだが，それは「いつも不満分子や変革を望むものがいる王国の一部の封建領主に対して勝利を収めることによってである。このことは，既述した理由により，あなた方に道を開き勝利を容易にする」。だが，トルコでは，政治的奴隷が支配的であった。自分より前の時代のアリストテレス，あとの時代のマルクスのように，マキャヴェリはこれをアジア的専制主義の本質であるとみなした。なぜなら，トルコでは，彼らは「すべて奴隷と隷属者なので，堕落させるのはより困難であり，たとえ彼らが賄賂を受けたとしても，人々を扇動できないがゆえに，効果がほとんど望めない」からである[19]。

十月革命後にソ連の権力を定着させたロシアは，そのように条件づけられてはいなかった。あいまいに表現されたレーニンの意見によれば，この運動の法則が新しい（ソビエト）の秩序に復古しつつあったツァーの（アジア的）政権のエージェントは，もちろん海外の友人や同盟者をみつけようと試みた。だが，国家主義的な分派集団，とくに理想主義の体裁をしたスラブ人以外は，ツァーの代理人には，国際的魅力がなかった。その影響力は，金銭の支払いが及ぶ範囲に限られていた。これとは逆に，ソ連によって行使された誘因力

とその非外交的対外能力（共産主義インターナショナル及びその補助団体）は膨大だった。モスクワが国際共産主義組織の創設と維持に相当額の資金を投入する一方で，この運動を支援する大衆には何の経費もかからなかった。この運動のメンバーは，復古したアジア的制度の代表者ではなかった。彼らは，社会的第五列の新しいタイプであった。

レーニンは恐らく，復古という見通しにおいて，こうした，あるいはその他の修正に気づかなかったし，この見通しの制度的可能性にも気づかなかった。半管理秩序（そこでは専制政権は経済制度の指令部上層のみを独占する）から全体的管理秩序（そこでは支配勢力が産業に始まって通常農業を把握していく生産・流通の全ての重要な支部を管理する）への変化は[20]，その権力経済と人口統制が組織上も運営上も，旧専制主義を遥かに超えるシステムへと帰結する。こうした状況下では，人々に向かう非人間性とは，専制主義の恣意性をめぐるエンゲルスのコメントをパラフレーズすれば，「われわれ西側社会には到底想像できない」という形態を想定しうる[21]。

エンゲルスは，この問題を社会史的な形態としてのみ見ていた。レーニンは，復古をめぐる論評の中でそれを将来に投影していたが，やはり社会的な形態のみで見ていた。二人は階級の観点で本質的には議論していた。社会的全体主義が進歩的と思われている階級からですら，完全な服従を要求する（不服従の場合は絶対的な罰を与える）一方で，新しい秩序の指導者は社会的観点で新しい政策を本質的に定式化する。だが，最後の数十年の恐るべき出来事は，ちょうど抑圧された昨日の階級が新しい方法で今日さらに残酷に抑圧されているように，抑圧された昨日の国家（民族）集団は，再び，しかもさらに残酷に，間接的に（海外での少数民族虐殺に対する支援を通して）もしくは直接的に（国内での根絶を通して）抑圧されることを示している。このように，全体的社会民族抑圧は，グーラクとアウシュビッツを結びつけるのである。

われわれはグーラクとアウシュビッツを忘れてはならない。われわれはま

た，権力経済の優位性とその軍事的論理に基づき，全体的な管理システムが地球全体に拡がるかもしれないということを忘れてはならない。新旧の支配的な「機能的」(アジア的) 権力に共通した制度的分母が，マルクスによれば，自己永続化という独自の能力をこの制度に賦与し，再びマルクスによれば，それが帰するところ不変性 (Unveränderlichkeit) に転じることを忘れてはならない。

C. マルクス：独自の社会的功績と独自の「科学に対する罪」

議論は最初のポイント，すなわちマルクスに立ち返る。われわれはどれだけ真剣に科学的探究者としてのマルクスを扱ってきただろうか。マックス・ウェーバーは，「単一の」真理発見力がマルクスの発展的構成 (Entwicklungskonstruktionen) に帰因するとした[22]。その新カント派的形態がわれわれにその存在論的意義からそらしてはならないと命じる判断力は，マルクスのマクロ史的範疇という生産性，および相互に連関したメソ及びミクロレベルでの歴史的洞察により確かめられる。この三つの次元の全てが，ヘーゲルが「東洋」と呼んだ世界に関するマルクスの研究により確認されている。エンゲルスのものを含む東洋の制度的特異性をめぐるさまざまな準備的概念に関して，アジア的社会の発見，及び世界史についての新しい概念へのマルクスによる突破力は，正統派マルクス主義者による伝統的努力とマックス・ウェーバーによる非伝統的努力にもかかわらず，否むしろ，それゆえに，今日でも不十分なままであるとはいえ，独自の功績だといわなければならない。

ウェーバーは学界ではアウトサイダーであるが，マルクス主義の領域でもそうである。その思想的鍛錬はマルクスのそれとは違う。1905 年から 1906 年のロシア革命に対するウェーバーの扱い方は，そのことを明確に示している。ウェーバーはレーニンの「ジャコバン」的姿勢に気づいていたし[23]，ボリシェヴィキの少数派とプレハーノフの多数派の 1906 年のストックホルム党大会における農業問題の論争 (衝突はアジア的復古をめぐる論争に収斂し

た）も知っていた[24]。それにもかかわらずウェーバーは，社会史的基礎を築き，次に起ころうとしているロシア革命でアジア的転機を許容する可能性が根底にあるという議論に十分関心を示さなかった。ロシアにおけるタタールの伝統について認識していたにもかかわらず[25]，ウェーバーは，ジャコバン派の見通しでの決定的要因が，たしかに西側の力としての高度資本主義（Hochkapitalismus）であると見ていた[26]。1918年までにウェーバーは，ストルイピンの改革を通してロシアの土地問題を新しい角度で見たが[27]，ロシアのアジア的過去とアジア的復古の可能性を扱った1906年の議論からは何も学ばなかった。

正統派社会民主主義者は，たしかにマルクスの思想的鍛錬を有していた。だが，偉大なるマルクス研究者であるロシア社会民主主義者，B. I. ニコラエフスキー（Boris I. Nicolaevsky）は，1958年に「今のところ」彼らはマルクスのアジア的概念にほとんど関心を払っていないと述べた。ニコラエフスキーによると，これらの概念が「マルクス主義の基礎」にとって，およびレーニンへの理解（すなわちロシア革命をめぐる）にとって[28]，いかに重要であるかが明白となったのは，彼が肯定的に評した『東洋的専制主義』が現れてからのことであった。

ニコラエフスキーの発言は，正統派マルクス主義者がマルクスの思想のこの部分にほとんど興味を示さなかったことを示唆している。彼らは，メーリング（Mehring），クノー（Cunow），カウツキー（Kautsky），R. ルクセンブルグ（Luxemburg），パーヴァス（Parvus），トロツキーのような有力なマルクス主義的社会主義者の理論的立場における重要な限界を暗に指摘した。彼らは究極的には，マルクス自身が相反する感情（ambivalence）を抱いて社会史的発見を取り扱ったという，さらに重要な事実さえも指摘した。

この相反する感情を明確にすることが不可欠である。1859年の『政治経済批判』への序文，1872年の『共産党宣言』の新ドイツ版への序文，『共産党宣言』に言及することなく，「普遍主義的」（＝単線的）歴史社会概念を非

科学的として拒否した1877年の書簡に対しての扱い，さらにそれらにおけるこの両義性がとった形態を理解することが重要である。

1859年の序文で，マルクスはその理論的原則（「導きの糸」）について，パリで着手し（1844年），ブリュッセルで続けた（1845年）経済学研究の「総括的成果」として語った[29]。ブリュッセル生活の時代（1845～1848年）にマルクスは，エンゲルスと共同で『ドイツ・イデオロギー』を著し（1845～1846年），1847年前半に『哲学の貧困』を単独で著し，1847年秋には，そのアウトラインをエンゲルスがパリで書き，マルクスが1847年12月から1848年1月にブリュッセルで徹底的に書き直したコミュニストの『信条』草稿[30]，すなわち『コミュニズムの原則』を著したが，それは1848年2月に『共産党宣言』として出版された。

不幸なことに，のちにマルクスの支持者は，マルクスの1859年の理論的宣言が歴史をめぐる「唯物論的」解釈を構成している決定的声明であると指摘した。実際，この宣言の第一，および第二パートにおいてマルクスが表明した構造と発展をめぐる議論のなかで，彼は本質的に『共産党宣言』に従っていた。マルクスはこのことを，物質的生産において自然的条件によって演じられる役割を強調しそこなうという構造的議論のなかでおこなった。その役割とは，マルクスとエンゲルスが1845年から1846年におぼろげながら認識し[31]，1853年に東洋の経済と政府のなかで，はっきりと見出したものであった。マルクスは，その宣言の最初の部分で，組織的生産力に賦課を与えることなく「物質的」生産力を強調することによって[32]，さらに『共産党宣言』にしたがったのである。これらの組織的生産力は製造業に顕著に現れ，巨大な規模では，「アジア的」世界に現れた。

マルクスは1859年宣言の第二のパートにおいて，単線的な概念と『共産党宣言』が示唆した必然的に進歩的なる発展を放棄しなかった。むしろ彼は，前述の考察によれば，発展をめぐる命題は古代にさえ有効でないかもしれないし[33]，その1853年の洞察では，アジア的社会には確実に有効ではないは

ずなのにもかかわらず，そうしたいかなる示唆もなしに，発展的テーゼを印象的に提示することにより，このことを強調すらしたのである。

マルクスはその宣言の第三，及び最後のパートにおいて，『共産党宣言』が成し得なかった特別な「アジア的」形態に言及することで，新世界の歴史的イメージをめぐってたしかな示唆を与えた。だが彼は，アジア的秩序を新しい洞察ではそれが当てはまらなかった連続した発展のパターンに置くことにより，このイメージを歪めた。マルクスは「序文」のコンテクストにおいて，「宣言」そのものよりも重要となった一文を書いている。「広義の輪郭では，アジア的，古典古代的，封建的，近代ブルジョア的生産様式は，社会経済形成の進歩的なエポックと呼ぶことができ，ブルジョアの生産関係は生産の社会的過程と相反する最後の形態である」[35]。

前述したとおり，この発展をめぐる命題は，古代については疑わしく，アジア的社会に対してはまったく受け入れられない。この命題は，古代世界の終焉に対して進歩的傾向を示唆していたが，マルクスとエンゲルスは，1945年から1846年にすでにそれに対して疑問を抱き，マルクスは1859年以降，明白に否認していた[36]。最も重要なのは，それが独自の地理経済と社会史的特徴から発展したアジア的社会独特の「停滞」的特徴を無視していることだ。この発展的命題は，アジア的生産様式の承認が，共産党宣言が主要な敵対社会に対して主張した社会発展の単線的な概念を否定するものではないと示唆している[37]。

マルクス（及びエンゲルス）の1872年の行動により，1859年の「進歩的」公式が何を示唆していたのかが確認できる。その二人の親友は，『共産党宣言』の新ドイツ版の序章の中で，細部ではいくつかの改良が必要ではあるが，「信条」の一般的原則はこれまでと同じく概して正しいと宣言した[38]。

マルクスが1877年，リベラルなペテルスブルグの雑誌，『オチェスヴェニエ・ザピスキー』（Otechestvenniye Zapisky）に宛てた書簡に対する姿勢は，いくつかの理由により重要である。この書簡で彼は，ロシアの独特な

「歴史的状況」は，資本主義経済秩序が封建的経済秩序から生まれ進化した西側ヨーロッパと異なることを強調するために，(ロシアの作家，N. ミハエルロフスキー〈N. Michailovsky〉がマルクスの原始的蓄積をめぐる概念を関連付けた）ロシアの社会史的過去と未来の問題を扱った[39]。西側ヨーロッパとロシアの発展条件における資本主義勃興の比較は，「歴史的状況が何であれ，全ての人々の運命に課せられた一般的なコースの歴史哲学的理論」を正当化しなかった。ロシアの作家はこうした見解をマルクスに由来しているとしたが，マルクスはそのことが自分に多くの名誉と侮辱を与えたと考えた[40]。

この議論において，マルクスは「1861年」以前のロシアの状態に対して，封建的及び資本主義的西欧の発展を並置した。1861年とは，ロシアがクリミア戦争の壊滅的な敗退に続く改革を経て，資本主義秩序への道を歩み始めた年である[41]。1881年，V. ザスーリチ（Vera Zasulich）に宛てた書簡の三つの長い草稿の中で，マルクスが詳細に行った重要な議論によると，「奇異なる状況の一致により」ロシアに「いまだに」現存する孤立した共同体は，西欧においては多かれ少なかれ消滅していた。この村落共同体は，ロシアでは，「おそらく領土の広大さが味方しており，またモンゴルの侵入によって広い範囲でほぼ定着していた」[42]。マルクスが以前仮定していたように，散在した村落共同体は東洋的専制主義の強固な基礎であり[43]，アジア的社会や国家を理解する手がかりなのである[44]。

『ザピスキー』の書簡の主要な部分で，マルクスは彼の四つの相反する秩序のうち，最初の発展の独自性，すなわち「アジア的なもの」，その停滞性をめぐる原因と事実に暗示的に言及した。この部分に付け加えた「範例」として，彼は第二の敵対的秩序の独自性，すなわち近代的経済システムに向けて発展する代わりに，後退していた「古典古代的」なものについて明示的に言及している。『資本論』のいくつかの節でこの現象について示唆しておいたと述べながら，マルクスは後期ローマの自由農民，大土地・財産所有者の

運命について指摘した。前者は，怠惰な群衆に堕落し，後者は「奴隷労働による生産様式以外，何の資本主義も形成しなかった」[45]。それは「異なった歴史的背景の中で生じた明白に類似した特徴のある出来事であり，まったく異なった結果となった。これらの発展のそれぞれを別々に研究し，比較することによって，この現象の手掛かりを容易に知ることができるが，超歴史的であることが最大の長所である歴史哲学的一般理論の普遍的な鍵によって，それを成し遂げることはけっしてできない」ということである[46]。

マルクスの『ザピスキー』への書簡は，その研究が1853年以来投げかけていた，世界史，アジア，ロシアについての全ての疑問に答えただろうか。明らかに答えていない。だが，それはブリュッセル時代のマルクスが与えた歴史の普遍的なイメージを批判していた。そのイメージとは，明白な矛盾と必ずしも明白ではない「科学に対する罪」に耽りつつ，1859年の宣言が与えたものでもあった。

私はこの「科学に対する罪」という用語をマルクスが1860年代初頭に使った意味で使用している[47]。マルクスとエンゲルスは1845年から1846年に歴史を科学と宣言したとき，まず歴史を科学のヒエラルヒーの中に置いた。1859年にマルクスが本質的に一連の歴史的概念として研究の理論的導きの糸を発表した際に，彼はこのことを確認した。1877年，普遍的アプローチを「超歴史的」と呼んだとき，マルクスはそれを非科学的だと非難した[48]。

『ザピスキー』への書簡は，マルクスが1853年以来抱き続け，20年以上も計画どおりには公開できなかった社会史的中心にある命題について指摘している。マルクスは1877年にさえ，世界史的概念のアジア的及び古典古代的要素の特異性を体系的に公開しなかった。だが，彼は力強く反普遍主義者としての立場を宣言した。マルクスが1865年に創造した定式をパラフレーズするならば，人の運命の世界史的パターンを実証する初期の試みと比べると，彼の『ザピスキー』への書簡での言明は，「明らかに貧弱」であるといえるだろう。とはいえ，彼のブリュッセルでの立場と比較すると，それは

「画期的」であった[49]。

マルクスは画期的な前進を始めたが，けっして完結はしなかった。ザピスキーへの書簡を書きあげておきながら，彼はそれを未投函のままにした。エンゲルスは，マルクスの死後，友人の書類の中から未発表のフランス語の草稿をみつけた。彼は1884年3月6日，マルクスがそれを書いた理由に気づいていたと記して，そのコピーをV. ザスーリチ（Vera Zasulich）に送った（ミカイロフスキー〈Michailovsky〉の記事，「シュコフスキー〈Shukovsky〉氏の裁判に際するカール・マルクス」を参照)。エンゲルスも同様に，それに応えてマルクスが書いた物を見たかどうか明確にしていないが，ある一点について確信している。「マルクスはロシアで出版されることを意図した文体を伴う形式で回答を執筆しているが，それをペテルスブルグに送ることはなかった。なぜならば，彼の回答を掲載する雑誌の存在が，マルクスの名前を通して，危険に晒されることを恐れたからである」[50]。

エンゲルスは，『ザピスキー』への書簡をジュネーブにいるロシアの友人に託して，「お望みのように，お使い下さい」と取り上げてもらう用意をしていた[51]。エンゲルスは，帝政の検閲制度がマルクスの新しい世界史観に対してもつ関心をおそらく過大評価していた。ところが彼は，マルクス主義者のそれに対する関心を明らかに過小評価していた。マルクス自身の『ザピスキー』への書簡に対する姿勢は，検閲制度の問題とは独立したものであり，はるかに重要であったことを確実に見落としていた。

書簡原本のロシア語訳が1886年，ジュネーブで出版された。それは私の知る限り，懲戒行為を助長することなく，1888年ペテルスブルグの法律雑誌にも掲載された[52]。つまり，ロシア語訳は，検閲制度は大幅に強化することとなったアレキサンドル2世の暗殺後の帝政においてさえ許容されていたのである[53]。政府の政策が緩やかでないにせよそれほど厳しくない時代であったのなら，ロシア皇帝の暗殺前に再版されていたのであろうか（『ザピスキー』〈*Otechestvenniye Zapisky*〉の出版は，1884年禁じられた)。

この質問への答えが何であろうと，マルクスが反普遍主義者の書簡の出版のために，彼自身が働きかけたペテルスブルグ誌の出版に頼っていなかったことだけは確かである。ジュネーブのマルクス主義者集団が1877年，『ザピスキー』への書簡の最初のロシア語訳を出版した1年後，そのドイツ語訳がチューリッヒの『社会民主主義者』（*Sozialdemokrat*）[54]，そしてニューヨークの『国民新聞』（*Volkszeitung*）に掲載された[55]。もし1887年，ドイツ社会主義サークルの関心がマルクスの世界史観にあったならば，1877年，すでにこのサークルにそうした関心が存在したというのは不可能ではないか。さらに，たとえ彼が望んでいたとしても，当時マルクスがこの問題に関する自らの考えを示し，西側諸国の出版販路を探すことは自由にできなかったのではないか。実際，もし彼がそれを行う力と意思を持っていたなら，寓話的な『ザピスキー』への書簡で行なうよりも，もっと開放的にこれらの考えを表明することができたのではないだろうか。

マルクスは1877年，何年もの齢を重ね，病を患いつつあった。彼のその後の草稿，通常の通信や覚書のような（V. ザスーリチに宛てた1881年の書簡での3つの草稿のような）書簡は，もし本人がそう望みさえすれば，肉体的にも精神的にも，新しい思考を確立する能力があったことを示している。ロシアでの出版をめぐる抑制がいかなるものであったにせよ，もしそれが彼の意思であったならば，世界史，そしてアジア，ロシアをめぐる思考のために他のより制限のない発表場所を探すべきではなかったのか。だが，この意思は欠如していた。ヘーゲルは厳格に宣告している。「結論に達しない意思は，本当の意思ではない（Ein Wille der nichts beschliesst, ist kein wirklicher Wille）」，と[56]。

50年代の新たな研究以来，マルクスを悩ませてきたジレンマは，この「すさまじい」方法で彼を悩ませ続けた。どうすさまじいのか。マルクスは60年代初頭，重要かつ新たな真理への探索が粗暴で野蛮なものになるかもしれないとみなしていたのである。リカードという偉大な学者としての手本

を見習いつつ，マルクスは，新しいもの，意味あるものとは，神とともにあって矛盾した事象から，矛盾を「堆肥」として，猛然と進化していくものであることを発見した（im “Dünger” der widersprüche, gewaltsam...)。矛盾それ自体は，理論がそこから無理強いすることとなる生きた土台の豊かさを証明する[57]。リカードが「科学的な誠実さ」を保持したように，学究的研究者が「禁欲的，客観的，科学的」であることを期待しつつ，マルクスは，何であれ外部の利害関心のためにこの原則に背くことを「科学に対する罪」であると考えた。そしてマルクスはこの判断から，実際的関心が労働者のものであったとしても[58]，その労働者を除外しなかったが，このことはマルクスの基準では最大の功績であった。

エンゲルスは 1859 年 8 月，『政治経済批判』についての批評のなかで，『共産党宣言』に即して，マルクスの理論的宣言の多くを披瀝した際に，こうした関心を指摘していた。だが，その引用の中でエンゲルスは，ブリュッセルのマルクスについての自伝的言及を省略したのみならず，そのアジア的生産様式の存在を（たしかに困惑しながらではあるが）示していた「宣言」最後の中心部分を回避していたのである。読者にこのような警告を与える代わりに，エンゲルスはその批評の中で，マルクスの最後の歴史的観点に焦点を絞った。「われわれが唯物論者の命題をさらに追究し，それを現在に応用するにつれて，きわめて大規模な革命，したがって，有史以来最も大きな革命の見通しが，われわれの前に即座に立ち現れてくる」[59]。

科学的に異質な問題関心は，マルクスとエンゲルスの立場からはたしかに並はずれているものであったが，明らかにエンゲルスを 1859 年，マルクスが 1853 年以来認識していた複雑で粗野な世界史的真理よりも，宣言に関する時代遅れな構造的理論，及び発展的理論に好意的に向かわせていた。これらの関心により，エンゲルスはマルクスの新たな立場を代表していないブリュッセルに発する議論を好んだ。これらの同じ「並外れた」関心は，理論的に卓越したマルクス主義者であるメーリング，クノー，カウツキーに対して，エ

ンゲルスが（いくぶん容易でなく）なしたことをのちにおこなう気にさせただろうか[60]。これらの問題関心は，プレハーノフとレーニンの「アジア的」なものをめぐる論争に精通していたローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）に対し，『共産党宣言』のもとにとどまらせ，エンゲルスがその 1888 年版にほどこした，表面的に再調整された階級闘争を擁護するよう決意させただろうか[61]。たしかに，1853 年以降，エンゲルスは東洋的専制主義と東洋的な意味で専制的なロシアへの全ての言及を避けなかった。だが，エンゲルスはその著作である『反デューリング論』，さらにそれ以上に『家族，私有財産，国家の起源』の中で，これらの問題を軽く扱っている。のちに彼は，アジア的問題とともにその著作でかつて取り上げていた自由についても言及しなかったが，1891 年には，すでに読んだと認めていたのに，「entre nous（ここだけの話），読んでいなかった」と述べるという厚顔さをうまく除去したことを喜んだ[62]。

マルクスの行動の矛盾は，まったく違う種類のものであり，もっと人をいらつかせ，掻き立てるものである。マルクスはヘブライの予言師ではなかった。彼は大切な時に自分の考えを公表しそこねたが，その知識と信念に基づけば，本来発言すべきであった。マクロ分析的問題の扱いの中で，少なくとも 1856 年から 1857 年以降，全般的奴隷化という観点と結びついていたアジア的社会とロシアをめぐる洞察について，彼は系統立てては明らかにしなかった。

だが，マルクスはヘブライの予言師ではけっしてない一方で，エンゲルスが行わなかった方法で真理と格闘した。マルクスは知識人の「罪」について極めて敏感だった。聖書における過去の偉大な人物たちがそうであったように，それについてきわめて敏感だった。これらの人々とは，われわれの時代では，先駆的新思考を創出できるだけでなく，知的かつ道徳的罪を犯しもする，ドストエフスキー的な英雄である。

マルクスによる類ない分析的功績を認める「アジア的」社会と権力をめぐ

る研究者が，マルクスが大まかに描いたアジア的準拠枠組みをはるかに超えなければならないのは，この理由による。だが彼らが，マルクスのアジア的なものをめぐるマクロ史的思考の骨子のみならず，マルクスが1853年に記録し始めたアジア的軌跡のメソ及びミクロ・レベルでの組織的詳細を最大限利用しなければならないのもまた，この理由による。

D. アレクシス・ド・トクヴィルの影

これはまさに，私が中国とアジア社会について1920年代半ばに調査を始めてから，最初はワイマール共和国下のドイツで，さらに1934年から1935年にアメリカで，1935年から1937年に中国で，そして再び現在にいたるまでアメリカで，精力的におこなってきたことである。私はよきコミュニスト，よきマルクス主義者であろうとするコミュニスト・マルクシストとしてこれらの研究を始めた。こうして，中国，アジア的生産様式，経済システムの発展における，そして生産の社会的過程をめぐる他の対立する様式における自然の役割に関する研究を進めていったのである。

マルクスのアジア的社会をめぐる考察を活用したいという願望は，私の経歴の最初の局面では強く，かつあからさまなものであった。ポスト・ドイツ時代の前半，すなわち中国から帰国してほぼ2年後[63]，スターリンとヒトラーの協定まで，その情熱を保持し，戦略的観点についてマルクスを引用し続けた。この協定後，マルクスを引用したくないという意志は，私の理論的及び政治的出発点であった「マルクス主義者」の運動からわが身を引き離すという決意の表れであった。

トロツキーに刺激されて，私は1923年，帝政ロシアのアジア的特徴を見出した[64]。だが学者としてのトロツキーには感銘を受けず，その考察にはそれ以上の関心を払わなかった。私はロシアをめぐる分析を共産党の同士，とりわけ能力があると思っていたソビエト・ロシア人に最初から託したままでいたので，コミュニストと手を切ったとき，ロシアについてのマルクスのア

ジア的解釈について何も知らなかった。

これは「アジア」に集中するために払った知的代償だった。私は他のほとんどのマルクス主義者以上に，マルクスの「アジア的」視点に精通し[65]，この分野での私の研究はモスクワでは歓迎されていないことを1920年代後半から気づいていた。だが，それがソビエトの指導者たちにとって，どのようなイデオロギー的かつ政治的な予告となるかについては気づいていなかった。1906年のストックホルム党大会でスターリンが「アジア的復古」に焦点を当てた議論に晒されていた事実を知らなかったし，その大会でスターリンがこれらの議論をレーニン主義に対する脅威ととらえ[66]，このストックホルムでの経験を1920年代には苦々しく記憶していたことに気づかなかったのである[67]。

それゆえに1931年，「中国という大農業社会の科学的分析の試み」として『中国の経済と社会』を出版したとき，マルクスのアジア的社会の概念に向けての方向づけは，基本的真理の意味では必ずや成就するはずの小さな逸脱と考えていた[68]。そこでの分析は，「生産力，生産と流通過程の分析」を扱っていた。実際，全体のほとんど500ページを中国の（アジア的）生産様式の農業的局面に捧げ，ほぼ300ページをその通信，工業，商業及び金融業の局面に費やしている[69]。

1931年のレニングラードでのアジア的生産様式の討論は，それに反する行為として私や非主流派の仲間らに警告を発したが，私は「アジア的」非主流派の立場を保持し続けた[70]。党の代弁者は，とくに自然の役割の強調をめぐり私を批判した[71]。たしかに，1929年に出版された『マルクス主義の旗の下』での一連の記事と私の著作『中国の経済と社会』（この本のロシア語訳は流通したが，ドイツ語版登場の前後に出版されなかった）のなかで，運動を促進する人間の行為と社会を方向付ける自然の受動性との間の異なる関係概念を提示することにより，マルクスの父（人）と母（自然）との関係の社会史的重要性を強調していた。

モスクワの管理下にあるほとんどのマルクス主義者が，この問題を取り上げるのをやめた1931年以降，そしてスターリンが「自然」をめぐる議論の妥当性を正式に否定し，マルクスの「アジア的」テーゼを捻じ曲げ，権威をもって捨て去った1938年以降も，私は中国とアジア的生産様式をめぐる研究を続けた[72]。ここでモスクワに管理されたほとんどのマルクス主義者とは，あるトロツキーの信奉者とエドガー・スノーを除いている。ハロルド・アイザックは，ほぼ4年間の執筆の後，1938年，『中国革命の悲劇』を出版した。彼は，伝統的中国の基礎を「マルクスが『アジア的生産様式』と呼んだもの」に置いた。アイザックは，それがカール・ウィットフォーゲルの『中国の経済と社会』における最も学問的な議論と一致していると主張した。アイザックの本の序文はレオン・トロツキー（「Coyoacan, D. F. 1938」）が書いている[73]。エドガー・スノーは，1936年，彼らにとって初めての西北部の首都を訪問した，中国のコミュニズムに共鳴する独立した社会主義者である。その著作，1938年に出版された『中国の紅い星』の中で，彼は多くの反スターリン的コメントをし（その後の版では削除された），「カール・アウグスト・ウィットフォーゲル博士」によって描かれた「アジア的生産様式」について言及した（これは削除されなかった）[74]。

スノーは自身の道を行き，トロツキーとその信奉者は彼らの道を進んだ。卓越したネオ・トロツキストの経済学者，エルンスト・マンデルは，1967年に出版されたマルクスの「経済思想」に関する彼の著作の中で，アジア的問題について詳しく述べている。それはアジア的生産様式をめぐる「大論争」が開始した数年後のことである。この本は，そのアジア的課題の扱いをマルクスの『経済学批判要綱』[75]，すなわち，今や有名になっている『資本論』のいくつかの章の最初の包括的草稿と結び付けながら，アジア的なものをめぐる研究の私の主要な第一歩である『中国の経済と社会』を賞賛している。マンデルは，私の研究の次の主要なステップとなる中国の征服社会，遼をめぐり，遼研究の世界的第一人者である馮家昇（Feng Chia-sheng）と共著

でまとめた『中国社会史 ── 遼』には無関心だった。マンデルは，私の研究における第三の主要なステップ，ウィットフォーゲルの最も新しい主著としての『東洋専制主義』を非難したが，それは「科学的客観性が明確に欠如している」という理由からであった[76]。

国際共産主義運動の中で，反対派であるトロツキストが黙らされつつあり，なおかつ中国に対して疑問をなげかけたトロツキーの姿勢がとくに攻撃された 1930 年代初頭に，マンデルがトロツキーやその支持者らのように，私がおこなった「アジア的」なものをめぐる反論を歓迎していたのは十分理解できる。マンデルは，「その後の 20 年間（すなわち，レニングラード後）で，アジア的生産様式の範疇は，まずソ連で曖昧になり，それから人民中国でさらにそれが強まり，最後には教科書から消えていくことが運命づけられていた。とはいえ，西側社会では，その間にカール・アウグスト・ウィットフォーゲルというドイツ人コミュニストがアジア的生産様式に対する歴史的著作に没頭し，これは結果的に社会学者の思考に継続的な効果をもたらした」と述べた[77]。

ネオ・トロツキスト集団の一員として，マンデルが『東洋的専制主義』を拒否したことも理解できる。トロツキーは，伝統的ロシアにおいて重要なアジア的特異さに長い間気づいていた。だが，彼はマルクスのアジア的概念をめぐるマクロ分析の深遠さに気づかなかった。それゆえに，ロシアの「後退した」労働者と農民の政権についてのその鋭敏なミクロ，およびメソ分析的批判は，ソ連が結局は正真正銘の社会主義秩序へ発展することを深刻に疑わせることはなかった。1905 年以来，ずっと抱いていたアジア的観点から自らを切り離すことはけっしてなかったものの，これがトロツキーの生涯続いていた立場であった。1939 年，マルクスの著作選集の序文において，彼は歴史を「経済のさまざまな制度の連続」と表現し，『共産党宣言』の中で示唆した三つの制度，奴隷制，封建的農奴制，資本主義について記している[78]。だが，晩年に著した著作『スターリン』の原稿では，「古代ロシアを含むア

ジア的歴史」，その社会は変わらずに，「救いようのないローテーション」で疲弊していったと書いている[79]。

ネオ・トロツキー主義者と彼らの仲間は，この矛盾を継承した。アジア的課題は彼らにとってほとんど意味を持たなかったので，ドイッチャー（Deutscher）やマルクーゼ（Marcuse）といった彼らの多くは，より目立たない形でこれを受け継いだ[80]。マンデルはこの課題をはるかに深刻に受け止めた。『カール・マルクスの経済思想の形成』の中で，彼は全ての章を，「アジア的生産様式と資本勃興の歴史的前提条件」に捧げている。だが，この本の最後の章で，他のトロツキー主義者が行ったように，ソ連に対する同じマクロ史的・社会主義的視点に行き着いた。彼はマルクス主義者としてのこの見通しを提出する努力を続ける中で，マンデルは「アジア的」と題した章で，帝政ロシアを「半アジア的」とするマルクスの解釈とロシアにおける「アジア的復古」というレーニンの観点を無視していた[81]。そして歴史的見通しについての最後の議論の中で，レーニンが動揺を抱きながら20世紀初頭（彼は1905年，ロシアに勃興した資本主義を「アジア的」と呼んだ）までのロシアのアジア的制度の持続を承認し[82]，10月革命後でさえそのことへの拘りについて再び主張したという事実を無視した[83]。マンデルは，不安を駆り立てるレーニンの議論を無視したのである。「いわゆる」社会主義[84]から真の社会主義への移行期についての彼の視点は，その出発点を「半アジア的社会」や「アジア的資本主義」ではなく，時には「資本主義的」と呼び，時には「ブルジョア的」と呼んだ社会経済的制度に置いたのである[85]。

こうした事情なので，マルクスとレーニンのロシアにおけるアジア的視点を必要としないマンデルが，私が復活させた視点である『東洋的専制主義』を必要としないことは，十分に理解できる。ロシアの「アジア的制度」に関する論評の中で，彼はウィットフォーゲルの『東洋的専制主義』の389ページから400ページを，「アジアティシズム」（Asiaticism）に関連するレーニンの一節のほぼ完全な要約として認めているものの[86]，この制度もしくは

アジア的復古についてのレーニンの概念を再生しなかった。レーニンが粗雑ではあるが間違いなくアジア的観念の基礎としていたマルクスの伝統的ロシアについてのアジア的解釈も復元しなかった。

一見すると，マンデルを理解するのはより難しそうに見えるだろう。彼は，私の知的冒険である『中国の経済と社会』及び『東洋的専制主義』に強く反応し，私が中国史プロジェクトの代表として企画・実施し，『中国社会史 ── 遼』として結実した中国と内陸アジアの研究にはまったく関心を示さなかった。私は著名な中国研究者，アルタイ族研究者，人類学者の小グループに助けられて，1939年後半，この研究を始めた[87]。研究は1943年に完了した。1946年，私が単独で担当したその「序文」が関心を持つ同僚らに送付された。全文（752頁）は，1949年にアメリカ哲学会により出版された。

たしかに，オリエンタリストでないマンデルには，大勢を占める意見とは反対に，中国人は支配の状態が続く限り遊牧的支配者とけっして同化しないという事実をめぐるわれわれの発見への関与を期待できなかった[88]。『中国社会史 ── 遼』によってアメリカが中国とアジアの現代研究を先導していたという高等教育機関（universitas literarum）の評価に喚起されることも期待できなかった[89]。さらに上記で述べた理由により，私はマルクスに言及しない中国征服王朝の分析を発表したが，マンデルは30年代初頭の中国経済と社会に関する私の分析に関心をもっていたので，40年代のこの分析には関心を示さなかったのだ，ということもできる。

だが，外見は必ずしも事実ではない。われわれの遼研究のデーターは中国征服王朝の経済と社会を幅広く扱った。そしてかつてトロツキストの仲間で，マンデルが1967年にはまだ権威があると考えていたヨーロッパの中国研究者E. バラーシュ（Etienne Balazs）は1967年，いくぶん寓話的とはいえ，たしかにこうした批評を認めて，私の『中国社会史 ── 遼』に関するデーターは社会史的に正しい（バラーシュが理解したように，マルクスの歴史解釈に一致していて正しい）と主張した[90]。

このネオ・トロツキスト経済学者のマンデルは，1967年の著作では，私が『東洋的専制主義』で強く主張した遼についての教えから後退した。それは私の分析がマルクスに敬意を払っていないからではなく，愚直なまでに，マルクスの半アジア的見解を強調したことがマンデルを困惑させたからである。40年代のはじめ，マルクスの半アジア的社会に関する概念は，まだ私にとって現実味がなく，新しい根拠が豊富ななかにあって，アジア的社会の周辺型として認識していた。そこでは，東洋的な専制政府が臣民を長い間統治する一方で，水力的機能はほとんど[91]もしくはまったく[92]果たしてなかった。私は，マルクスについての自身の新しい研究によって，周辺のアジア社会とマルクスの「半アジア的（半東洋的)」ロシアの制度的類似性がわかった1947年から1948年に，より深くその重要性を理解した。50年代の初めから半ばにかけて，講義や論文でこの類似性についての手がかりを提示した。中期及び後期ビザンチウム，遼，古代マヤ社会，そして帝政ロシアに関して，同じ『東洋的専制主義』のとくに第6章でそのことを確認した[93]。そして同著作の第9章と補足の論文で，絶対的な東洋的専制主義により統治された半アジア的社会としてのモンゴルとポスト・モンゴルのロシアに関するマルクスの言及について論じていった[94]。

マンデルは東洋的専制主義を理解していた。そして彼は，ロシアについてのマルクスの思想に対してきわめて敏感であり，しかも『東洋的専制主義』でのこれらの思想の私の再提起を拒絶するほどに敏感だった。マンデルは，私が『中国社会史 ── 遼』で行ない，『東洋的専制主義』で強調したアジア的社会の原型についての説明は，明らかに否定しなかった。彼は，ただそれを読者に知らせないままでいた。誤った議論の連鎖のなかで，科学に対する一つの罪は，また別の罪を生じさせるのである。

自立したように見えるマルクス主義者が多くの国で成しえなかったことを，自立したアメリカ人アナリストができるだろうか。アメリカ人中国研究者，ジョン・F・フェアバンクの行動は，アメリカ合衆国の世論形成者を取り巻

く困難さを暗示している。フェアバンクは，第二次世界大戦中とその直後，中国に滞在し，新旧の（コミュニズム）中国の現実に同時に接触した結果，偏狭な思想のレベルを一時的に超えた。中国からアメリカ合衆国に戻った後に，1947年と1948年はじめに著した『アメリカ合衆国と中国』で[95]，歴史を創る勢力に対する理解に劣るということについて新しい見解を得さえすれば，アメリカ人は成功裏に外交政策に到達できると宣言した。この著作でフェアバンクは，「社会史家の先駆者であるK. A. ウィットフォーゲル博士に従い」，自らの中国へのアプローチを深めることを追求した。この先導に従って，彼は伝統的中国を「古代の東洋的社会モデルの代表であり，ヨーロッパやアメリカのより近代的社会とは根本的に異なる」と分類した[96]。

フェアバンクには，われわれの遼研究から学ぶことを躊躇させてしまうアンビヴァレントなマルクス主義的抑制はなかった。彼は，「20年以上の間，『東洋的社会』としての中国に関して最も豊かな考え方を提出したウィットフォーゲルは，『中国社会史 —— 遼』の序文で，とくに遊牧民の征服王朝を扱っている」と主張した[97]。彼は読者にこれらの征服社会に対して強い関心を払うように促した[98]。そして，東洋で最近直面した現実を振り返り，新旧中国の慎重な研究は，「マルクス主義とロシア」について同じように慎重な研究で補足されるべきだと主張した[99]。

フェアバンクの意見では，アメリカ人は中国について現実的に研究したのだろうか。残念ながら，否である。中国の伝統的アナリストは，古代中国社会を伝統的思考，とくに儒教的思考で眺めることで満足していた。現代的探求者であれば，もちろんこれらの思考に適正な関心を払うだろうが，彼らはそれらを「社会的政治的文脈」の中に置くであろう。フェアバンクは，これに失敗した人々を「皮相的」と呼んでいる。残念ながら，アメリカ人は，現代中国をめぐる彼らの研究についても，同様に不適切である。この研究は，非中国的思考にも，そしてとくに中国以外の国についても必要であるが，残念ながらアメリカ人は，「マルクス主義とロシア」の両方に無知であった[102]。

私がマルクスのより深い洞察，中国圏の周辺アジア的社会と半アジア的ロシアへと移っている間に，フェアバンクは1947年から1948年にかけてこの本を著していた。社会及び政治に関するアメリカ人アナリストは，国際社会において効果的行動の鍵となるこれらの洞察に精通していただろうか。フェアバンクは1948年，精通できると望んでいた。そして1950年，第二回地域研究全国大会のメンバーは，私の論文「ロシアとアジア」に対して肯定的に反応したとき，明らかに同様に考えていたのである。

だが，新たな環太平洋の発展，とくに中国共産党政権の定着は，現実的力の前進を阻んだ。それはアメリカの世論を国家の旧中国（国民党）及び新中国（共産党）に対する姿勢についての感情が充満した，議会的「調査」を好むという激しい衝突へと分断した。この衝突は，理性的な広い視野での対処（それは真理と自由のために重要となる）を犠牲にして，国際問題に関する狭い視野での間に合わせの処置（それは時には望ましいものである）に偏向した。

中国の専門家として私は，不可避的にこの衝突に巻き込まれた。そして1951年の夏，自身の意思に反して，国内の安全保障を調査する上院小委員会に召喚された。委員会の弁護人と参加した議員による質問にできるだけ忠実に答えた後，自分の証言の最後に，委員会のメンバーではないジョセフ・マッカーシー上院議員の前で，魔女狩りに対する懇請をはさんだ[103]。証言において私は，ヒトラーに権力を与え第二次世界大戦の勃発を許してしまったモスクワの役割を含む，査問全体に関係した出来事や権力を分析する必要性も強調した[104]。悲しいかな，どちらも何の効果ももたらさず，後者については，反全体主義的な労働キャンプでの私の友人やこの公聴会が公正に開かれたと考えるリベラル派の間でさえそうであったのである[105]。

衝突には多くの根源と反動があった。それはフェアバンクとその友人たちの中国研究を，以前に「皮相的」と非難した偏狭で断片的なアプローチに変更させることとなった[106]。それは，「マルクス主義とロシア」の研究におけ

る粗雑な姿勢を再構築させた。その姿勢は，『東洋的専制主義』の出版でいくらか揺らいだものの，実際に妨げられることはなかった。1950年にアレクシス・ド・トクヴィルの訓戒をアメリカの民主党員へそれほど楽観的にではなく援用した著名なアメリカの政治学者，G. A. アーモンドは，1960年には，世界を形成する諸機関についての（新たな）世論形成者たちの理解に対して，さらに楽観的ではなくなっていた[107]。

『東洋的専制主義』の中で，私はアメリカと海外の社会科学者と世論形成者たちに，「水力」経済（私はこの著作の最初の5章をこれに捧げた）が長い間無視されていた世界史的問題に対する手がかりを与えると知らせた。それは今や手がかりではなくなった。水力的（アジア的）中心地域の多様性，この世界の水力的境界と境界近くの地域への異なったアプローチを確立するために，この分析結果を表明することは必要であった。分岐点である第6章でそれを行ってから，私は第7章で，私有財産の問題（それはアジア的経験の例証なしには，十分に認識できない）に関する発見について，第8章では支配階級としての官僚制の問題（それは，絶対的支配権力の受益者にとってはとくにタブーであった）について詳しく述べた。私は第4章で，マルクス（及びエンゲルスとレーニン）のアジア的システムについての見解を明白に示すことにより，これらの探求をクライマックスに到達させた。それは，最初からの章を通して，暗黙裡に関係づけてきたものだった。そして私は第9章と最終章の全体の研究をめぐる結論を，われわれの時代の「アジア的」発展，過度期の分裂したアジア的社会，ソ連と共産主義中国におけるアジア的復古の現実にあてはめた。

これは『アジア的専制主義』の中で私がとくに「アジア的なもの」を強調しながら提出した世界史観である。繰り返せば，この概念は，マルクスがアジア的社会と半アジア的ロシアの概念を通して与えた転機をめぐりとくに強調した社会と歴史の古典的概念を基調としている。繰り返せば，この概念は，われわれの時代の主要な衝突に対する科学的分析へと導き，さらに人間の偉

大なる社会的，歴史的伝統に基づきつつ，これら諸勢力についての唯一の科学的扱いへと導いた。古典ギリシアや新古典ヨーロッパに暗い影として出現した政治的奴隷制の現象は，全体主義的政治や経済的奴隷制の形態において，今日，世界の決定的問題となっている[108]。現実のアジア的復古と全体主義的政治，経済的奴隷制（及び全体主義的な疎外）の認識を結びつけることで，われわれは現代の究極的な理論的・政治的問題に直面していることを理解するのである。

アメリカの社会科学者は，マックス・ウェーバーのマルクスに対する矛盾した関係に言及するとき，彼らの方法でこの問題を取り上げた。そして彼らは，マルクスの世界史観を扱ったが，ある一点までで，そこから深く分析することはなかった。本質的問題を「皮相的」に扱ったと思えば，次にはそれを横において「他のことに向かう」という，トクヴィルを悩ませた人間の宿命について，私は落ち着かない学生たちに注意を喚起しているのである[109]。このような行動は，トクヴィルの時代にはほとんど良しとされなかった。今日においても間違いなく良いことではない。それはそうでなければ彼らの物となるはずのリーダーシップの資格を，アメリカ人から奪うこととなるのである。

トクヴィルの訴えは，現在ではかつてよりさらに重要となったヨーロッパ的局面を含んでいる。どんな技術的な言い訳（時間，空間や金銭の欠如）をもってしても，ヨーロッパの多元的国家の世論形成者たちは，19世紀の遺産を継承したポピュリスト（あるいは非ポピュリスト）の警告に直面する義務から免れることはできない。この警告は，押し付けられてはならない。だが，無視してもいけない。アメリカの民主主義についての偉大なるフランスの研究者は，「人民」が自分たちの国の外交政策を行う危険性について認識していた。「人民の大半は自らの無知や情熱にそそのかされるかもしれない」[110]。だがトクヴィルは，独裁的支配者に忠信を置くこともなかった。「絶対的王は，ゆらぐだろう」[111]。彼は，貴族政治のみがこの任務を遂行できる

と主張する。英国は立憲「君主制」で，貴族政治は明らかに社会的不正義に悩まされたという事実にもかかわらず，トクヴィルは，それがリベラルさ（liberality）とリーダーシップの両方で他の全てのものに勝ると宣言したのである。「かつて英国ほど自由な貴族制や価値ある啓蒙された人材を絶えず政府に輩出した国を私は知らない」，と[112]。

トクヴィルの主張の限界は明らかだ。だが，たまたま西欧の国々は（西洋的）絶対主義の時代から自由や政治的奴隷，さらに西洋と東洋（アジア的）専制主義の問題を科学的に分析するには十分に自由であった。この過程で歴史と社会に対する古典的な思考は，イタリアのトマス・アクィナスとマキャヴェリ，フランスのボダンとモンテスキュー，英国のヒュームとアダム・スミス，ドイツのヘルダーとヘーゲルによって再構築され詳述された。

では今日，経済と権力をめぐる国際問題について，一体誰が誰を導いているのだろうか。残念ながら，ヨーロッパの偉大なる遺産は，虚弱な相続人に受け継がれてしまった。第一次世界大戦後，ヨーロッパの世論形成者は不安定になった。そして第二次世界大戦後，ヨーロッパの新しい世論形成者は，アメリカの権力（それは巨大である）とアメリカの権力理論（それは情緒的である）を一緒に受け入れることが都合のいいことであるとわかった。

困ったことに，思想（権力本位の思想）の領域で起きたこととは，トクヴィルが期待したことの反対であった。事実は明らかである。だが，それは決定的だろうか。ヨーロッパの開かれた歴史的状況には，マルクスが考えたような「偶然」や「選択の自由」はないのだろうか[113]。この小さな，だが偉大なる大陸の自由な市民たちは，彼らの先祖が持っていた知的かつ道徳的リーダーシップを再び主張できず，民主的アメリカの継承者たちは債務不履行（default）で成り行き任せにさせることになるのだろうか。この運命づけられた大陸の市民は，マルクスが哲学及び経済の古典から引き出し，自由の科学を彼が見たとおりに（一貫せずとも挑戦的に）適用した思想を，認識し，かつ実行することは不可能なのだろうか。彼らは，これらの思想を認識し，そ

れを落ち着かないアメリカの研究者と共有することはできないのだろうか。彼らは歴史的状況を構成しているのが何であり，何がそれを阻んでいるのか，順序正しく，科学的に説明できないのだろうか。レーニンの名を援用できないだけでなく，レーニンのロシア社会と革命についてのアジア的様相をめぐる一触即発の思想を，彼らに代わって使うことはできないのだろうか。マルクスとレーニンの出した指令は，きわめて不完全である。だが，彼らの自立した適用こそが，ヨーロッパとアメリカにおける思想闘争の傾向を覆すことができるのである。

インドに対しても，その他のコースは代替物にはならない。半アジア的ロシアでは，開放的歴史状況のもつ不可抗力（accident）は，アジア的復古の力との闘いとトクヴィルが民主主義と呼んだものの促進に，意識的に使われなかった。インドでは，完全なるアジア的社会の解体は，マルクスの議論における意味でのもう一つの巨大な「不可抗力」を生み出した。そこに内在する概念とはきわめて古かった。アリストテレスは，その信奉者に「暴政」(tyranny：それは内部から打倒されうる）と「アジア的」専制主義（despotism：それはそれゆえに崩壊しない）を区別するように説いた[114]。新古典派，とくにボダン[115]とモンテスキュー，そしてマルクスが古典的独裁(tyranny）の概念に新しい転機を与えていたので，この思想は今日，流行遅れになっているはずである。だが，残念ながら，アリストテレスによるこの概念的区別の中心は，かつてと同じように時宜を得たものとなっている。残念ながら，今日，われわれの偉大なる世論形成者，そして政策立案者の多くはそれを認識すらしていないのである。

現代西洋研究者が学ぶことがきわめて難しいとわかったことを，インド人はアリストテレスやマルクスから学べるだろうか。ボリス・ニコラエフスキー(B. I. Nicolaevsky）が私に話したところによれば，ブハーリン（彼は当初，マルクスの「アジア的」概念をほとんど使わなかった）は1936年，西側への最後の訪問中に彼に連絡を取り，これらの概念にとり憑かれたと彼に話し

ていたのだという。学術的な情報源を通して私に届いたもう一つの情報によれば，年老いたジャワハルラル・ネルーは，マルクスのアジア的制度の概念にますます心が揺り動かされるようになったと，ある著名な外国人に伝えていた。アメリカの高位の政策立案者が1949年，アジアの危機に関する国務省への助言を執筆中に私の見解を求めた。私は自国の資源をできるだけインドの経済的，政治的民主主義の道の促進に集中すべきである，という理性的な助言をした[116]。それゆえ私は，今日，マルクスの「自由」をめぐる議論をインドに適用するとき，唯一，一貫している。インドの世論形成者は，一時的な暴君（tyranny）がまさに「アジア的復古」を実現するためにうまくやるかもしれないが，その必要はないのである。ロシアの10月革命の戦士は，自分たちが「解放」したものが何なのかについてほとんど無知であった。今日，政治的（及び経済的）奴隷制の歴史は，1917年よりはるかによく知られている。これはインドについても然りである。

そして現代日本についていえば，技術，スピード，発明の才をもって，市民が自国を一流の工業国にしたことは印象的である。同様に印象的なのは，西洋では資本主義的企業とプロレタリアートの意識や組織の発展とともに歩んだ，経済学，及び政治学に対する彼らの高い関心である。日本の知識人が第一次世界大戦の終わりからマルクスを取り入れた問題関心は，その資本と労働についての思想（その領域では，ソビエト版の教義が目立って現れた）と「アジア的」経済と社会についてのマルクスの思想（この領域では，「アジア的」見解をめぐるスターリンによる否認が，国際的には不均等に広がったため，それらと中国についての「アジア的」分析に関する私の著作は，第二次世界大戦の始まりまで，広く翻訳され，読まれた）に鼓舞されたものである[117]。この戦争の終わりまでに起きたことは複雑である。だが，今やマルクス主義者と非マルクス主義者の研究者のいずれもが，私の見解について，もともと彼らが肯定的であったのと同じくらい，否定的であることが支配的である[118]。

アジア的生産様式についての日本の議論は，共産主義国家の内外で1962年から行われてきた「大論争」とは多くの細かい点で異なっているが，一つの点では類似している。それは不安を駆り立てるロシアの問題を，覆い隠したままにしようという究極の努力を明らかに反映しているということである。そこには，マルクスの半アジア的ロシアの解釈をめぐる顕著な認識はない。ロシア的社会と革命に関するレーニンのアジア的解釈についての顕著な認識もない。アジア的社会，ロシアと中国における「アジア的復古」の概念に関する日本人の議論は，著名な東ヨーロッパのコミュニスト，テーケイやその友人によって，私がマルクスの「アジア」に関する貴重な概念を奪っていると表現された事実と同じくらい，決定的に混乱しているのである。

このような志向をもつ日本のマルクス主義者，非マルクス主義者が，その変形も含めて歴史と社会の研究に関する古典的かつ新古典的遺産を拒否したことは疑えない。このように方向づけられた日本人が，その不安なる同国の人々から，ロシアと中国の現実に関する社会史的理解，そしてこの現実から現れた「アジア的復古」への理解の鍵を奪うことも疑えない。「科学的誠実さ」についてのマルクスの基準を受け入れる日本の知識人にとって，これは良いことなのだろうか。明らかに否である。アジアにおける多元的社会の先駆けの国，日本として良いことなのだろうか。もちろん，否である。人類が達成した民主主義の拡大を擁護しつつ，日本人はまったく正しくも，「ハードウェア」(軍事的重装備，とくに核兵器）の問題を慎重に扱っている。

だが，「ハードウェア」は重要ではあるものの，今日では十分でない。小規模戦争という補足的問題を認識することも，今日では十分でない（アメリカ人がこの問題を自国の立場で理解するよりも，日本人はおそらく，世界における立場で理解しているのであろう[119])。

アメリカの挑戦は際立っている。現代のグローバルな危機に対するたしかなる理解は，「ハードウェア」，「小戦争」，そして第3の究極の問題として，今日一般的に「道徳的性格」と呼ばれているものに対するアメリカの理解に

とって，決定的に重要である。マジノラインは，おそらく軍隊のハードウェアをめぐる近代システムにとっては，それほど良い基盤ではないであろう[120]。それを作った人々が生半可な気持ちで周囲の防御を計画し，それを遂行した人々が同様にアンビヴァレントな思いだったとすれば，それは災いを招くであろう。同じことは，今日の自由主義世界の周辺で勃発している小規模戦争についてもいえる。もしこうした戦争が，愚かにも着手され，愚かにも行使され，愚かにも終結されたとすれば，彼らの行為は，知的潜在可能性に対しても，倫理的潜在可能性に対しても，正義をもたらすことはないであろう。

E.「アジア」の権力的側面と世界史の再検討

たしかに，道徳的性質と知的「誠実さ」とは相互に連関している。科学への罪は，究極的には道徳的罪である。マルクスのアジア，ロシア，そして世界についての成就しなかった真実の探求は，道徳的問題に根差した科学的問題を構成している。

マルクス主義者は，まず現在のグローバルな危機表明の背後にある経済力を見るように主張した。こうした経済力を最も慎重に受けとっていたマルクスは，現代の政治経済への喫緊の研究をはるかに超えることによって，ロシアにおけるアジア的（半アジア的）解釈をクライマックスに到達させたのである。まさにこれこそ，マルクスがその「新発見」（revelation）において，ロシアに関連して行ったことであり，われわれの現在の中心的課題，すなわち「経済的に」脆弱な勢力（半アジア，ロシアの継承者）が，近代的政治経済の支配者に打ち勝つかもしれないという可能性を，まばゆい閃光のように照らし出す分析によって行ったことである。これはマルクスが展開できなかった「アジア的」概念の局面であった。その歴史的発見は「詳細な説明」を必要とすると主張しつつ，彼は何度かその方向に突き進んだが，自分が発見したドラマ（壮大なドラマ）の中心的部分を説明しなかった。また彼は，比較上の組織的，政治的現実と結びついた比較上の環境的，経済的現実のための

アジア的概念とその具体的な意味についても確立しなかった。

1. 東洋的専制主義 ── 絶対的権力に関する比較研究

私は『東洋的専制主義』を絶対的権力の比較研究として著した。このアプローチは，「新発見」の著者により創出された世界史への見通しを代替するものではない。だが，それはこの見通しのための事実的，概念的な基礎をたしかに提供するものである。それは自然的条件の意義を貶めるものでなく，むしろその歴史的構成機能を強調している。エネルギー問題の自然的根源を無視するマクロ戦略家は非現実的である。もし立地（「Lage」）に関する自然的根源を無視するとすれば，同様に非現実的である。

そしてこのアプローチは，水力経済の意義を過小評価するものではない。それはアジア的国家に他に類のないの耐久力を与える独特の組織的条件を説明するものである。耐久力，それは発展の罠（本来，「水力的な」罠）であり，もしわれわれがこのように条件付けられた形態の政治的，経済的及び社会的奴隷制の悪夢のような意義を理解したいのなら，その頑強さを理解しなければならない。

マルクスの1856年から1857年での発見後の著作の中に意味論的に現れている組織的改革の思想は，その後に続いた現代の政治経済についての諸研究において多くの注目を集めたが，散逸しているアジア的なものへの言及はほとんど注目されなかった。それは私の世界史のイメージであるとともに，『東洋的専制主義』の中で展開されたアジア的イメージの本質的部分をなしている。これらのイメージを基にすると，共産主義革命とは，組織的革命として見ることができる。この現象は今日まで，ほとんどの非コミュニスト系マクロ戦略家の注目を逃れてきたが，それは彼らの制度的背景と方向付けの一部をなしていないからである。

『東洋的専制主義』は，一般的には無視されてきたが，マルクスが開拓者として断片的に認識した世界史の諸相を発展させることを目指した。これら

の様相を見出すことは，長過ぎるまでの間，われわれがその解決を当たり前だとみなしてきた奴隷制と自由の問題への新しい回答を与えるのである。

2. 自由についての科学を弄んではいけない！

奴隷制を理解する安易なる道はない。そして，自由を理解する安易なる道はない。奴隷制と自由の問題を扱う者は誰でも，全体性と歴史的深遠さにおいて，それらにアプローチしなければならない。トクヴィルがそれに対して警告している態度のように，不注意であったり，「皮相的」であってはならないのである。

『東洋的専制主義』に対するあるヨーロッパの書評子は，この研究を「自由の科学」と呼んだ。実際，それは奴隷制と自由についての科学である。反乱を弄んではいけない。エンゲルスはかつてそう記し，そしてこれにマルクスが同意した。より命令的には，次のようにいってよいであろう。奴隷制の科学を弄んではいけない，自由についての科学を弄んではいけない！

《注》

1　テーケイは1962年，謄写版として配布を許可する前に，その講義に関するフランス語のテキストを編集した。この編集版には回収（reprendre）の文字を含んでいなかった（see F. Tökei, *Sur le "Mode de Production Asiatique."* 編集者は，"Centre d'Etudes et de Recherches marxistes" の名で，住所とともに記されていたが，日付はなかった）。シェノーは1964年に2回，1962年7月の「大論争」の詳細なる報告と補足的書籍の解題をめぐり，再度回収勧告付きで作成した（see *La Pensée,* No. 114, April 1964, pp. 35 and 71. 両方の版において，シェノーは，*"reprendre"* という言葉を強調している）。

2　Jean Chesneaux, "Ou en est la discussion sur la mode de production asiatique," in *La Pensée,* No. 129, October 1966, p. 39, note 10.（当該論争の一部を掲載している本田喜代治編訳『アジア的生産様式の問題』岩波書店，1966年にはこの論文は収められていない—訳者。）

3　Karl A. Wittfogel, *Oriental Despotism. A Comparative Study of Total Power.* New Haven, London 1957, p. 391ff. Hereafter cited as *OD.*

4 *Ibid.*, pp. 393, 399, 450.

5 *Ibid.*, pp. 391f.

6 *Ibid.*, p. 375f and 379.

7 Karl A. Wittfogel and Feng Chia-sheng, *History of Chinese Society: Liao (907-1125)*. With the Assistance of John de Francis, Esther S. Goldfrank, Lea Kisselgoff and Karl H. Menges, *Transactions of the American Philosophical Society,* Vol. 36 (1946), Philadelphia, March 1949, *passim.* Hereafter cited as Liao.

8 Karl Marx-Friedrich Engels, *Werke* (1957-1966) Vol. 28, p. 267. Hereafter cited as MEW. See also next note.

9 マルクスがニューヨーク・デイリー・トリビューン (*New York Daily Tribune*) の 1853 年 6 月 10 日，7 月 22 日に書いたインドに関する二つの記事の二つ目の冒頭で，「この書簡で私はインドに関する考察について結論を述べる」と記している。この二つの記事（書簡）は 1853 年 6 月 25 日，8 月 8 日付けの *NYDT* にそれぞれ出版されていている。

10 MEW 23, p. 373f.

11 "Karl Marx fiber Indien and China, mit Einleitung von Rjasanov," *Unter dem Banner des Marxismus,* 1, 2, 1925, p. 370 *passim.*

12 See below. 石堂清倫訳『十八世紀の秘密外交史』三一書房，1979 年。

13 *Ibid.*, pp. 399f and 438f. レーニンが望んだロシア革命ののちに示されたそのアジア的復古についての見解は，躊躇しながらも開拓者として，「けっしてうまくは定式化されていない概念を構成している」。だが，この理由ゆえに，その見解は的外れだったのだろうか。この疑問は，チャーチルの言葉を想起させる。「民主主義は，政府の全ての形態で最悪なものである。その他全てのものを除いてではあるが」。See Wittfogel, "Problems of Marxism and Relations Between the East and West" in *The Soviet Union: The Seventies and Beyond,* edited by Bernard W. Eissenstat; Lexington, Mass. 1975, p. 46. Hereafter cited as 1975.

14 Wittfogel, "China and die osteurasische Kavallerie-Revolution," *Ural-Altaische Jahrbücher,* 49 (1977). p. 33. Hereafter cited as 1977.

15 Wittfogel, "Russia and Asia," *World Politics,* II, 4. 1950. p. 461. Italics added. Hereafter cited as 1950.

16 Milovan Djilas, *Conversations with Stalin.* New York 1962, p. 74.

17 J. Stalin, *Works* (13 vols. Moscow 1952-55), 6, p. 302. Hereafter cited as *Works.*

18 See International Press Correspondence 1934, p. 50. さらなる参考としては，Guttmann's "slanderous" accusation see pp. 27, 108, 188, 189, 320, 622, 636 (Guttmann was expelled from the Communist movement in December 1933,

ibid., p. 50). コミンテルンの最高位の職員らに知られているように，私がスターリン，ヒトラーに関する内部の事情に精通するようになったのは，グートマン（Guttmann）との1940年代半ばから深まりつつあった親交を通じてであった。ロシアのアジア的復古がもたらすであろう底知れない結果を，1949年から私に強く強調させたのは，この洞察であった。A. ケスラー（Arthur Koestler）は，*The Yogi and the Commissar* についての重要な議論について，P. マイアー（Peter Meyer）の分析を基調にしている（"The Soviet Union: A new class Society," published in *Politics,* April 1944.)。この分析は，私のアパートの住人同士のグループの前で最初に発表された。著者のP. マイアーとは，J. グートマン（Joseph Guttmann）のことであった。

19　*OD,* p. 361f.

20　*Ibid.*, pp. 48 and 439f.

21　MEW 18, p. 567.

22　Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenchaftslehre,* Tübingen 1922, p. 204f.

23　Max Weber, "Zur Lage der bürgerlichen Demokratie in Russland," *Archiv für Sozialwissenschaft and Sozialpolitik,* 22 (igo 6), pp. 246 and 281. Hereafter cited as Lage.

24　Max Weber, "Russlands Ubergang rum Scheinkonstitutionalismus." *Archiv* 23 (1906), p. 283 Hereafter cited as Ubergang.

25　Weber, Lage, p. 18, Ubergang, pp. 249 and 396.

26　Weber, Lage, p. 347.

27　Weber, *Gesammelte Politische Schriften,* Tübingen 1921, p. 110, note and p. 107.

28　Boris I. Nicolaevsky, "Marx and Lenin on Oriental Despotism," *Sotsialisticheskii Vestnik,* February-March 1958, p. 53.

29　MEW 13, p. 8.

30　D. Riazanov, *Karl Marx and Friedrich Engels,* New York 1927, p. 76ff. 全文は，Der Bund der Kommunisten, Dokumente and Materialien, Vol. 1, Berlin, 1970, pp. 1057, 1081, 及び付属テキスト参照。

31　See MEW 3, pp. 21 and 44. マルクスの場合，この姿勢は，彼の学生時代と学生以前の日々に戻っている（See *ibid.*, p. 28 note and *Marx Engels Archiv,* Vol. 2, 1927, p. 117ff.)。

32　私は "Produktivkräfte" を通常のように，生産力（productive forces）としてではなく，生産的権力（productive powers），もしくは，生産の権力（powers of production）として訳している。これらの用語は一般的にマルクス自身が採用したもので，彼は適切な英語の成句や文を引用する時，主に古典経済学者から

引用した。彼の用語の使い方を見ると，われわれは，再度，彼の古典派経済学者との強い結びつきに気付く。(See *NYDT*, August 8, 1853; Marx, *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie,* Berlin 1953 p. 636 [Hereafter cited as *Grundrisse*] ; MEW 26, 1, pp. 40 and 402 [Adam Smith] ; 26, 2, pp. 570 and 623 [Ricardo] ; in connection with Richard Jones, MEW 26, 1, p. 18, 26, 3, p. 406, reference to On Rent. ジョーンズについて調査している間，マルクスは時おり，社会労働の生産力 (productive forces) という定式を使った (*ibid.*, p. 414)。

33　W 3, p. 24.

34　プレハーノフの「進歩的」という定式をめぐる議論は，それに対する私のコメントと同様に不適切である。両者ともにマルクスが理論的宣言を組み込んだ自叙伝の背景に適切な注意を払っていない (see *OD*, p. 416, note d)。

35　MEW 13, p. 9. 武田隆夫他訳『経済学批判』(岩波書店，1978 年)，14 頁。

36　See below, note 45.

37　MEW 4, p. 462f.

38　*Ibid.*, p. 573.

39　MEW 19, p. 108.

40　*Ibid.*, p. 111.

41　*Ibid.*, p. 108.

42　*Ibid.*, p. 388.

43　*NYDT* June 25, 1853 ; cf. MEW 9, p. 132.

44　MEW 23, p. 379.

45　MEW 19, p. 111f.

46　*Ibid.*, p. 112.

47　MEW 26, 2, p. 111ff.

48　レーニンとプレハーノフは，『ザピスキー』(Zapiski) への書簡に大変魅かれており，その中でマルクスが，普遍主義者の見解を現実的でなく，皮相的であるとして拒否していたことを理解した。マルクスの主張に続いて，レーニンは 1894 年，最初のマルクス主義者としての主要な著作において，「一般的」かつ「抽象的」歴史へのアプローチを，形而上学的と呼んだ (V. I. Lenin, *Collected Works,* Moscow 1963 passim, 1, p. 143ff. Hereafter cited as CW)。プレハーノフは一年後，同じ課題に同様の方法で取り組んだ。マルクスに従って彼は，普遍主義的アプローチを「神秘主義的」であると主張した (G. Plekhanov, *Selected Philosophical Works,* Moscow, n.d. 1, p. 759)。

49　MEW 16, pp. 2–5.

50　MEW 36, p. 121.

51　*Loc cit.*

52　MEW 19, p. 558.

53　See Richard Pipes, *Russia Under the Old Regime.* London 1974, p. 300f. Hereafter cited as 1974.

54　MEW 19, p. 558.

55　See Karl Korsch, *Karl Marx.* New York 1938, p. 167, note 2. Hereafter cited as 1938.

56　Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts. Hegel, Samtliche Werke,* Bd. 7, Stuttgart-Bad Cannstadt, p. 65.

57　MEW 26, 3, p. 80.

58　MEW 26, 2, p. 112ff.

59　MEW 13, p. 470.

60　「やや容易ではないにもかかわらず…」。3人全員が，1859年のマルクスの序文を，その理論的立場の明確な表明として扱った。彼らは1858年のマルクスの宣言の中核となる要素を再生しただけでなく，彼が紹介した自叙伝的言及も指摘した。メーリングは，ブリュッセルの文を省略したが，3つの点を打ち，その省略を示した（Franz Mehring, *Karl Marx,* 1918, p. 265）。クノーも同様であった（Heinrich Cunow, *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts- und Staatstheorie,* Berlin 1920, Part 1, p. 249）。カウツキー（Kautsky）は，「点」こそ使わなかったが，やはりブリュッセルの文は省略した（Karl Kautsky, *Die Materialistische Geschichtsauffassung,* Berlin 1927, Part 1, pp. 20 and 806.）。

61　論点となっている思想に対するローザ・ルクセンブルグの議論は，パーヴァス（Parvus）とトロツキーのそれと同様に複雑である。そして他の二人のロシア起源のマルクス主義者のそれのように，ここでは分析されない。しかし，次のようなことくらいはいえるだろう。ローザ・ルクセンブルグは，東ヨーロッパからドイツに政治的行動範囲を移してから，プレハーノフとレーニンが行ったように，「アジア的」議論には立ち入らなかった。彼女は，アジア的専制主義とロシアの旧秩序における東洋的専制主義的な要素の存在に気づいていた。それゆえに彼女は，共産党宣言の歴史的な原則の発表は，他のドイツ人マルクス主義者の多くが思っているほど容易ではないことを明らかに感じていた。しかし，彼女はマルクスが『ザピスキー』の書簡で行ったように，この問題には深くは立ち入らなかった。そして，共産党宣言の階級闘争の命題に関するエンゲルスによる時代遅れの調整に関与することにより，その重要な問題について説明するのではなく，むしろ曖昧にした。『共産党宣言』の中で，マルクスは対立する社会に関してのみ階級闘争について言及しているので，エンゲルスが原始的共同社会においてはそれが存在しないとした1888年の言及は正しいが，この文脈では的外れである。ローザ・ルクセンブルグのエンゲルスに対する『共産党宣言』の調整に関する試みについては，その *Ausgewählte Reden and Schriften,* Vol. 1, Berlin 1951, p. 524. を参照。経済的秩序の連鎖において東洋的専制主義を構築しようとする試みは，全てが想定さ

れたとおりに分解，崩壊し，全てが資本主義の勃興に寄与することとなった。これについては，*ibid.*, p. 673.

62　MEW 38, p. 117. を参照。このこととそれに関連した事柄に対するエンゲルスの態度をめぐる問題には，きわめて凝縮された論考の中では必然的に議論しきれないいくつかの局面がある。だが，関心ある読者には，ウィットフォーゲルの「マルクスとエンゲルス」をめぐる議論を参照してほしい（1975, p. 32f.)。それはマルクスがマクロ分析者としての能力を持ち，エンゲルスのアプローチと質的に異なることを示唆している。エンゲルスは，マルクスの知的「重砲」と執筆への着手前に全ての利用可能な証拠に精通しようとするその尋常ならぬ強い衝動について，マルクスの卓越性を躊躇なく認めている。しかしながら，エンゲルスが自らの限界を抱えつつも，たとえ酔っていた時にも素早く，そしてすばらしく表現しているのは，マルクスの意見そのものである（MEW 28, 596, letter to Adolf Cluss, October 1853)。もう一つ付け加えれば，クラス（Cluss）の書簡のなかでいくぶんユーモアのあるトーンを斟酌しつつ，エンゲルスはその概念的な枠組みの中で，ほとんどいかなる場合にも，きわめて意味深く，鮮やかに記していた。私の知るところでは，彼はマルクスがそうであったように，「科学への罪」と闘わなかったというのが，のちに私がためらいながらも到達した結論である。これら全てを考慮すると，エンゲルスの『起源』本には，人類学的文献の利用を超えてこの本の評価に際して考慮に入れなければならない厚かましさの要素が存在することを忘却してしまう権利はわれわれにない。エンゲルスはけっしてマルクスではないのである（See *OD*, p. 385f. See also Wittfogel, "The Hydraulic Approach to Pre-Spanish Mesoamerica" in *The Prehistory of the Tehuacan Valley*, General Editor, Richard S. MacNeish, Vol. IV, *Chronology and Irrigation*, edited by Frederick Johnson, Texas: 1972, pp. 64 and 78)。

63　See Wittfogel, "The Foundations and Stages of Chinese Economic History," in *Zeitschrift für Sozialforschung*, IV, 1935, p. 50 ; *idem "Wirtschaftsgeschichtliche Grundlagen der Familienautorität,"* in *Studien über Autorität and Familie*, Vol. V Schriften des Instituts für Sozialforschung ; Herausgegeben von Max Horkheimer, Paris, 1936, p. 478 ; *idem.* "Die Theorie der orientalischen Gesellschaft, in *Zeitschrift für Sozialforschung,"* VII, 1938, p. 118.

64　Wittfogel, *Geschichte der bürgerlichen Gesellschaft*, Wien 1924, p. 110f. この本は 1924 年に書かれた。

65　For Socialdemocratic Marxists see Nicolaevsky, "Marx and Lenin on Oriental Despotism," see above, note 28. For the Communist Marxists, see the judgment of Mandel, below.

66　J. Stalin, *Works*, I, Moscow 1952, p. 238.

67　*Idem, Works*, see 6, p. 57f.

68　See Wittfogel, *Wirtschaft and Gesellschaft Chinas.* Versuch einer wissenschaftlichen Analyse einer grossen asiatischen *Agrargeselischaft. Erster Teil, Produktivekräfte, Produktions und Zirkulationsprozess. Schriften des Instituts für Sozialforschung an der Universität Frankfurt a. M.,* Herausgegeben von Carl Orunberg, Leipzig 1931. Hereafter cited as 1931. 平野義太郎監訳『解体過程にある中国の経済と社会（上，下）』原書房，1977年。

69　*Ibid.,* pp. 7-494 and 494-762.

70　See G. L. Ulmen, *The Science of Society. Toward an Understanding of the Life and Work of Karl August Wittfogel,* The Hague (1978), Chapter IV. Hereafter cited as 1978.

71　「歴史的に開放された状況における人間の自由」と人間の「技術的準備」をめぐる現実を認識しようという試みとして，私は『東洋的専制主義』において，言葉の狭い意味で経済学的ではない，制度形成の効果を無視する経済決定論者を批判した（see *OD,* pp. 11 and 161f.)。私の1929年と1957年における「水力的」議論の全体は，私の全体の結論を否定するものではないことを明確にした。第一に，「制度的状況」が等しいとすれば，「新たな形の技術のもつ本質と社会制御の発展」を示唆し，容認または排除するのは，「自然的背景（natural setting）の相違」である（*ibid.,* p. 11）；第二に，水力は与えられた自然的背景に反応する。それは「非常に特別な文化的状況下」でのみ起き，もちろん技術的変化というよりは組織を巻き込む道具の使用を必要とする。そしてその組織的中心となるしくみは，「協働」である（*ibid.,* pp. 161 and 25)。水力的な反応とは生産する人間と自然的背景との間の一般的関係の一つの特別な，そして歴史的にではあるがたいへん重要な転形であるすぎない。ペティ（Petty）から得たマルクスの命題に基づきつつ，私は物質的富の生産が，基本的に人と自然の相互交換（Stoffwechsel）の中にあり，その過程において人は父であり，地球は母であることを詳説した（MEW 23, p. 57f.)。この命題では，積極性と受動性が二つの異なった機能を充足している。前者の要素は，運動の要因を，後者は運動が作用するかしないかの方向性を決める条件を示している。私はこの議論を，ヘーゲルがすでに対象の「目的」設定の役割を考察し，しかもこの点でレーニンがヘーゲルに従っていたという事実と連関させつつ，1929年に提示した（see Wittfogel 1929, *Unter dem Banner des Marxismus,* III, p. 723)。私は1929年，人間と自然の関係における自然の二つの局面を認識したのである。しかし，同時に私は大規模組織が制度的及び歴史的に果たす役割を明白に理解しなかった。1924年と1926年から私は，この問題と格闘し，『マルクス主義の旗の下で』（*Unter dem Banner des Marxismus*）での論説で，仮に一貫していなかったとしても，概念的に論じ始めた（1920, pp. 721 and 726)。中国については一貫して（1931, pp. 126, 129, 410ff ），東洋的社会全般については1938年に発端として，そして全面的な形態として1955年，1956年，とり

わけ 1957 年に論じていた (*OD*, pp. 25ff. and 161f)。

72 See *OD*, p. 408.

73 Harold Isaacs, *The Tragedy of the Chinese Revolution*, London 1938, pp. 2, 457 and XXV. (鹿島宗二郎訳『中国革命の悲劇 (上, 下)』至誠堂, 1966 年)。

74 Edgar Snow, *Red Star over China*, New York 1938, p. 78. (松岡洋子訳『中国の赤い星 (上, 下)』筑摩書房, 1995 年)。

75 Ernest Mandel, *The Formation of the Economic Thought of Karl Marx*, New York and London 1971, p. 129. Hereafter cited as 1971.

76 *Ibid.*, p. 128.

77 *Ibid.*, p. 118f. このスペルはもともとのものである。

78 *The Living Thought of Karl Marx based on Capital: A Critique of Political Economy*, presented by Leon Trotsky, Philadelphia 1939, p. 3.

79 Leon Trotsky, *Stalin*, New York 1941, p. 425.

80 See Wittfogel, "The Marxist View of Russian Society and Revolution," *World Politics* 12, 1959–60, p. 505f. text and notes. Hereafter cited as 1959–60.

81 Mandel 1871, pp. 127f. and 117.

82 Lenin CW 9, p. 48.

83 *OD*, p. 398ff. See also Wittfogel 1975, p. 54ff.

84 Mandel 1971, p. 201.

85 *Ibid.*, p. 191 *passim*.

86 *OD*, p. 117, note 4.

87 *Liao*, p. 33.

88 *Ibid.*, p. 15.

89 Wittfogel 1977, chapter "Nothing Comparable."

90 Mandel 1971, p. 123, note 26 and Wittfogel 1977, chapter "The China Study of the Future."

91 *Liao*, p. 363.

92 *Ibid.*, p. 663.

93 *OD*, pp. 173–195.

94 *OD*, pp. 375 and 379. Cf. Wittfogel 1959–60, p. 490ff.

95 John King Fairbank, The United States and China, Cambridge 1948, p. 266. Hereafter cited as 1948. (市古宙三訳『中国 ── 社会と歴史／アメリカと中国 (上, 下)』東大出版会, 1972 年)。

96 *Ibid.*, p. 53.

97 *Ibid.*, p. 353.

98 *Ibid.*, p. 78ff.

99 *Ibid.*, p. 260.

100 *Ibid.*, p. 59.

101 *Ibid.*, p. 260.

102 See above, note 15.

103 See Ulmen 1977, chapter XII.

104 *Loc. cit.*

105 *Loc. cit.*

106 Wittfogel 1977, notes 152 *passim and text.*

107 Gabriel A. Almond, *The American People and Foreign Policy,* New York, 1967, p. XXIX.

108 Wittfogel 1975, *passim.*

109 Alexis de Tocqueville, *Democracy in America,* ed. J. P. Mayer and Max Lerner (New York 1966), p. 402ff. Hereafter cited as 1966.

110 *Ibid.*, p. 212.

111 *Ibid.*, p. 213.

112 *Ibid.*, p. 216.

113 See Marx, 1953, p. 30.

114 Wittfogel, 1975, p. 16.

115 *Ibid.*, p. 18f.

116 See Ulmen, 1978, Chapter XII.

117 *Ibid.*, Chapter IV.

118 *Ibid.*, XVII.

119 韓国と台湾とのワシントンの同盟を弱体化させた政策は，明らかに日本の防衛システムを弱める。また明らかにワシントンの軍事的及び政治的なアジア内，及びアジア以外における信頼をそこねる。

120 軍事的な「ハードウェア」について言及する時，私はもちろん究極的な技術的武器，核兵器を含めている。指導者が自らの防衛システムを核の攻撃以外は全て完全に整えている超大国の権力は，周辺での可能性を否定しているが，それは最大限の危険を包含するものである。プレハーノフは，その同志たちに，ナポレオンは自らの計画について全ての好ましい条件が揃うという仮定に基づいて作戦を計画した将軍を愚かだと見なしたことを想起させた。条件はけっして揃わない。全ての戦略的愚かさの中で，核兵器の愚かさは，最も自滅的である。

121 See above, note 58.

122 私はここでは，上記で引用した論説のシリーズに言及している。私はまた，1980年代の終わりにフランクフルトで出版されたドイツ語版の *Revelations of the Diplomatic History of the 18th Century* における私の序文に言及している。

123 *Ibid.*

124 *Ibid.*

125 *Ibid.*

126 See my Banner articles of 1929, cited above in note 71. (In Banner Vol. III, p. 706ff.)

127 開発の罠の思想は，もちろんマルクスに由来する。「水力的な罠」は，アメリカの人類学者，マーヴィン・ハリスによって提唱された。See his Cannibals and Kings, *The Origins of Cultures,* New York, 1977, p. 153 passim.

128 MEW 8, p. 95.

(いしい・ともあき　商学部教授)